

トルコにおいて伸張する「イスラーム国」 -- その起源と構成 (分析レポート)

著者	今井 宏平
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	250
ページ	40-47
発行年	2016-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00002917

トルコにおいて伸張する「イスラーム国」

―その起源と構成―

今井 宏平

●はじめに

トルコにおいてテロの連鎖が止まらない。二〇一五年六月から二〇一六年四月までにアンカラ、イスタンブルを中心に七回もの大規模テロが発生した(表1参照)。犯行声明が出ていないものもあるが、実行犯はクルディスタン自由の鷹 (Teyrebazên Azadiya Kurdistan : TAK)⁽¹⁾と、「イスラーム国」(Islamic State : IS)⁽²⁾に大別することができる。

TAKが活動を活発にさせた背景は、二〇一五年七月のトルコ政府とクルディスタン労働者党 (Partiya Karkerên Kurdistan : PKK) の停戦破棄、そして停戦破棄以降、トルコ南東部でのトルコ軍とPKK、特に青年過激派グループである愛国革命青年運動 (Yurtsever Devrimci Gençlik Hareketi : YDGH) の衝突に

よるクルド人の犠牲者の増加に求められる。TAKがPKK傘下の組織かどうかに関して検討の余地はあるとしても、都市部に潜んでいた潜在的過激派がその活動を活性化し理由は存在するのである。

一方、ISに関しては、トルコにおけるISとはどのような人々によって構成されているのか、トルコのISは一枚岩の組織なのか、その目的とは何か、などいまだに多くのことがよくわかっていない。二〇一五年以前、トルコはシリアに向かう外国人戦闘員の交通路となっていたが、トルコにおけるISの活動は可視化されていなかった(参考文献①)。しかし、二〇一五年以降、ISはトルコで五回のテロを実行し、二〇一五年六月からはトルコ語による機関紙『コンスタンティニエ』(Konstantiniye)を発刊している。

本稿は、最近のトルコにおけるテロに関して、その活動実態がいまだ不鮮明な、トルコISの活動に焦点を当て、入手可能な公開情報を基に、その起源と構成について素描する。その手がかりとして、①二〇一五年にトルコで起きた一連のISによるテロの実行犯であり、アドゥヤマン県出身者を中心に結成された「ドクマジュラル・グループ」(Dokumacılar Grubu)、②アドゥヤマン県と並び、ISの戦闘員を輩出しているビンギョル県における過激派のルート、③二〇一五年一〇月二八日に内務省が公開した危険人物リストにおいて最重要人物に指定されたイルハミ・バル (İlhami Bal) に代表されるトルコISの幹部、④ISがトルコのなかでも潜伏先、兵站線として使用しているキリス県とガズィアンテプ県の状態、という四

表1 2015年6月以降にトルコで発生した主なテロ

日時	場所	実行犯	犠牲者
2015年6月5日	ディヤルバクル	IS	4名死亡
2015年7月20日	スルチ	IS	32名死亡
2015年10月10日	アンカラ	IS	103名死亡
2016年1月12日	イスタンブル	IS	10名死亡
2016年2月17日	アンカラ	TAK	28名死亡
2016年3月13日	アンカラ	TAK	37名死亡
2016年3月18日	イスタンブル	IS	5名死亡

(出所) 新聞など参照し、筆者作成。

つの視点から考察し、トルコISの実態を浮かび上がらせたい。

●「ドクマジュラル・グループ」の起源と実態

(1) 「ドクマジュラル・グループ」による一連のテロ事件

表1にあるように、二〇一五年の間にISによるテロがトルコで三回起きた。最初のテロは、六月五日にクルド系政党の人民民主主義党 (Halkların Demokratik Partisi : HDP) のディヤルバクルにおける集会で爆発が起こり、

四名が死亡、一〇〇名から四〇〇名の負傷者が出た。この集会にはHDPの共同党首であるセラハッティン・デミルタシユ (Selhattin Demirtas) をはじめ、多くのHDPの議員が参加していた。この事件の実行犯としてその後、ガズイアンテプ県で拘束されたのが、アドウヤマン出身の若者、オルハン・ギョन्दルであった。ギョन्दルは、自爆ではなく、集会の近くで携帯電話を売っていた男に、ビニール袋に入った爆弾を「睡眠薬が入っているので集会が終わるまで預かってくれ」と預け、犯行に及んだ (T24、二〇一五年六月八日付、<http://t24.com.tr/haber/diyarbakirdaki-saldirilar-gerceklestiren-kisinin-isis-militani-oldugu-iddia-edildi.299106>)。

七月二〇日には、トルコ南東部のシヤンルウルフア県スルチでコバニ (アイン・アラブ) 復興のボランティアを狙った自爆テロが起こり、三二名が死亡、一〇〇名以上が負傷した。スルチは、二〇一四年九月から二〇一五年一月までISとクルド民主統一党 (Partiya Yekitiya Demokrat: PYD) およびその軍事部門である

クルド人民防衛隊 (Yekineyen Parastina Gel: YPG) を中心としたクルド人勢力が激しく争ったシリアのコバニから国境を挟んで程近い地域であった。ボランティアに参加していたのは、主にクルド人の若者であった。スルチの事件の実行犯もアドウヤマン出身の二〇歳の若者、シェイフ・アブドゥラフマン・アラギョズであった。

さらに一〇月一〇日にアンカラの中心部、スーヒエで主にクルド系団体と左派系団体によって催された平和を求める集会を狙った大規模な自爆テロが発生、一〇三名が犠牲となり、トルコ共和国史上最悪のテロ事件となった。この自爆テロの実行犯はその後、スルチでの自爆テロの実行犯であったシェイフ・アブドゥラフマンの兄で二五歳のユヌス・エムレ・アラギョズと、シリア人の男性であったことが判明した。

二〇一五年に起きた三回のテロ実行犯はいずれもアドウヤマン出身の若者であり、標的とされたのは主にクルド人のグループであった。アドウヤマン出身のトルコ人から構成されるISのグループは、当初「アドウヤマン・グループ」

と呼ばれていたが、その後、アドウヤマンでISのリクルーターをしていたムスタファ・ドクマジユ (Mustafa Dokmaci) の名前をとり、「ドクマジユラル・グループ」と呼ばれるようになった (アル・モニター、二〇一五年一〇月二三日付、<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2015/10/turkey-syria-isis-adiyaman-suicide-bomber-arsenal.html#>)。

トルコの内務省が公表した危険人物リストにおいて、「ドクマジユラル・グループ」は、リクレーターであるドクマジユが最も危険とされる赤色リストに、それ以外のメンバーがその次に危険な青色リストに名を連ねた (表2参照)。内務省は二〇一六年四月初旬にリストをアップデート

ートし、青色リストに名を連ねるISメンバーは二〇名となった。(2) 「ドクマジユラル・グループ」の結成
 それでは、「ドクマジユラル・グループ」はどのようにして結成されたのだろうか。その手がかりはまず、彼らの出身地であるアドウヤマンにある。アドウヤマンは

表2 内務省の危険人物リスト (青色) に名を連ねたIS関係者

名前	出身	出生年
ハジ・ユスフ・クズルベイ (Hacı Yusuf KIZILBAY)	アドウヤマン	1993
カスム・デレ (Kasım DERE)	アドウヤマン	1984
マフムット・ガーズィ・デュンダル (Mahmut Gazi DÜNDAR)	アドウヤマン	1993
メフメット・ムスタファ・チェヴィック (Mehmet Mustafa ÇEVİK) ⇒当局監視下	アドウヤマン	1992
オメル・デニス・デュンダル (Ömer Deniz DÜNDAR)	アドウヤマン	1993
ヤクツプ・アクトウルム (Yakup AKTULUM) ⇒当局監視下	アドウヤマン	1988
メフメット・イシイク (Mehmet ŞİK)	アドウヤマン	1996
メフメット・タシャル (Mehmet TAŞAR)	アドウヤマン	1994
ムハメット・ザナ・アルカン (Muhammet Zana ALKAN)	アドウヤマン	1995
エルセル・オジャック (Ersel OCAK)	アドウヤマン	1994
マフムット・ガジィ・タタル (Mahmut Gazi TATAR) ⇒YPGに拘束	アドウヤマン	1991
レジェツプ・ヤマン (Recep YAMAN)	アドウヤマン	1984
アイシェヌル・インジ (Ayşenur İNCİ)	アドウヤマン	1994
デメト・タシャル (Demet TAŞAR)	アドウヤマン	1994
メルヴェ・デュンダル (Merve DÜNDAR)	ドイツ	1996
ウルカル・マモドヴァ (Ulkar MAMODOVA)	アゼルバイジャン	1987
カディル・ギョズカラ (Kadir GÖZKARA)	アドウヤマン	1992

(出所) "İçişleri Bakanlığı en çok arananlar listesini yayınladı", Radikal, 28 Ekim, 2015.

アドゥヤマン県の県庁所在地である。アドゥヤマンでISのリクルート活動が始まったのは、二〇一三年頃からとみられている。

まず、リクルーターであるドクマジュは大学入学の準備をしていたマフムット・ガーズィ・デユンダールとオメル・デニズ・デユンダールという二人の兄弟を誘い入れ、彼らをシリアに渡航させた(『ラデアカル』紙、二〇一五年一〇月二一日付、<http://www.radikal.com.tr/turkiye/ankara-saldirisini-dokumaci-ar-mi-yapti-1449795/>)。

次に名前が出てくるのがアンカラのテロの実行犯であったユヌス・エムレである。ユヌス・エムレはアドゥヤマンの中心地に近いバフチェチック地区の出身で、アラビア語の教育を受けるために、二〇〇八年からアフガニスタン、シリア、イラク、イラン、サウジアラビアなどに渡っていた。その過程でイスラーム、特に過激な言説に惹かれるようになったと考えられる。そして二〇一四年に帰国後は「イスラーム・チャイ・オジヤック」というチャイハネ(トルコの喫茶店)を始めるとともに、アドゥヤマンのいくつかの地区で若者にイスラームの教えを説いて

いた。弟のシェイフ・アブドゥラフマンもチャイハネを手伝っていた。ディヤルバクルの事件の実行犯であるオルハンも同じバフチェチック地区に住み、ユヌス・エムレの経営するチャイハネによく顔をだす友人であった。ユヌス・エムレは、チャイハネの中二階をイスラームの教えを説いたり、議論したりするサロンとして使用していた。二〇一四年一〇月にギョンドルの父親などが息子の行動がおかしいとして、「イスラーム・チャイ・オジヤック」を訪問するとともに、警察に通報した。ユヌス・エムレは二回に渡り、警察に出頭させられ、その後、「イスラーム・チャイ・オジヤック」は閉店し、アラギョズ兄弟は二人とも二〇一五年三月から行方不明になった。

ドクマジュはアドゥヤマン県から約四〇〇人の若者をISに引き入れ、その内六〇人は自爆テロ実行犯として訓練されたとみられている⁽³⁾。もちろん、リクルートされた若者の親も状況を静観していたわけではない。シリアへ渡った若者の親の多くは、トルコ警察に調査を依頼したり、シリアもしく

はシリア国境まで直接出向いて息子を説得したりしている(『ラデアカル』紙、二〇一五年六月五日付、<http://www.radikal.com.tr/turkiye/diyarbakir-saldirisinin-arka-planini-alevi-kurt-zanli-isiside-boyle-katlimis-1379173/>)。しかし、多くの場合、親たちは子どもたちと会うことができず、運よく引き戻すことができたとしても、多くの若者は精神的に不安定な状況に陥ると報告されている。

また、YPGによって捕虜となつていとみられるマフムット・ガージ・タタールは、ISに加わる前にアドゥヤマンのチャイハネで実施されていた「宗教教育キャンプ」に参加したと証言している。このようにアドゥヤマンは、ISに出身者が加わるだけでなく、トルコにおけるISの出先の役割も果たしているようである。

通常、トルコ国内でリクルートされた若者は、ガズィアンテプ県からシリアに入り、以前はタツル・アブヤド、二〇一五年後半からはラッカに赴く。「ドクマジュラル・グループ」のメンバーは、PYD/YPGとの戦闘に参加しており、前記したオルハン・ギョन्दル、シェイフ・アブドゥラフマンと

ユヌス・エムレのアラギョズ兄弟も二〇一四年一〇月にタツル・アブヤドに入ったとみられている。

(3) 共和人民党代表団によるアドゥヤマンでの聞き取り調査

ディヤルバクルとスルチでの事件を受け、第二政党の共和人民党(Cumhuriyet Halk Partisi: CHP)の議員団が二〇一五年七月三〇日と三一日にアドゥヤマンを訪問し、そこでISに渡った若者たちの家族、NGO職員、警察署職員、さらにはスルチでのテロ実行犯として服役しているギョन्दルなどへの聞き取り調査を行った(CHP議員団のアドゥヤマンにおける調査に関するレポート、<https://www.chp.org.tr/Haberler/17/chp-milletvekillerinin-adiyaman-dayapiktari-inceleme-ye-iliskin-rapor-2651.aspx>)⁽⁴⁾。

そのインタビューから明らかにしたISにリクルートされた若者の行動は、①若者たちは夜九時から一〇時あたりに家を抜け出し、チャイハネに行き、夜遅くもしくは朝方帰宅する、②ひげを伸ばしたり、伝統的なムスリムの衣装を身に着けたりする、③母親や女兄弟にスカーフを着用するように論

じる、④政府が指名した導師、政府が運営するモスクで礼拝することを否定する、⑤トルコの他の地域に旅行に行くという名目で数万円持って外出する（実際はシリアに行く）、というものであった。また、シリアでロシア人やドイツ人の女性と結婚し、妻、場合によっては子どもをもなつてアドウヤマンに帰省する。多くの者は、一度アドウヤマンに帰省してから再度シリアに渡っている。

また、ギョンデルとのインタビュにおいて、ギョンデルは家族から常に勉強しろ、働けといわれることに反発していたこと、学習塾に入ってから礼拝をしたり、国際的なネットワークを持ち、トルコ国内でも最有力の神秘主義教団であるナクシユバンデー教団の会合に参加したり、チェチェン紛争のビデオをみたりしたことを説明している。そして、ISと爆破事件に関しては、彼自身はシリアに行かず、ディヤルバクルには爆破事件の一週間前に行ったことなどを説明している。ただ、彼自身が面会の際に述べているように精神的に病んでおり、証言が正しいかは疑問の余地があるだろう。

(4)なぜアドウヤマンなのか

人口約六〇万のアドウヤマン県は、非常に保守的な県であり、一般的にはクルド系政党の支持基盤であるトルコ南東部に位置するが、総選挙では二〇〇二年以降、公正発展党 (Adalet ve Kalkinma Partisi: AKP) が勝利し続けている。二〇一五年に実施された二度の総選挙においてもAKPへの高い支持率が目立った(表3参照)。アドウヤマン県からISのメンバーが多く出ている背景として、保守的でイスラームの教えに従順である点、アドウヤマン県の経済状況がよくない点などが指摘されている(アル・モニター、二〇一五年七月二三日付、<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2015/07/turkey-adiyaman-isis-connection-sunuc-bombing.html>)。アドウヤマン

県はイスラームに熱心な人が多いのに対し、そうした人たちの受け皿となる地域に根ざした有力なイスラーム組織がない。この点が、アドウヤマン県の若者が直接ISに赴くようになる理由のひとつである。確かにアドウヤマン県はトルコ国内の有力な神秘主義教団のひとつである「メンズイル教団」

(Menzil Cemati) の拠点である。しかし、「メンズイル教団」は、トルコ共和国の原則のひとつである政教分離を受け入れ、政治については論じないことを特徴としている。あくまで教育の普及や麻薬・アルコール依存から脱却するため、のりハビリを活動の中心に据えている。そのため、ISに感化され

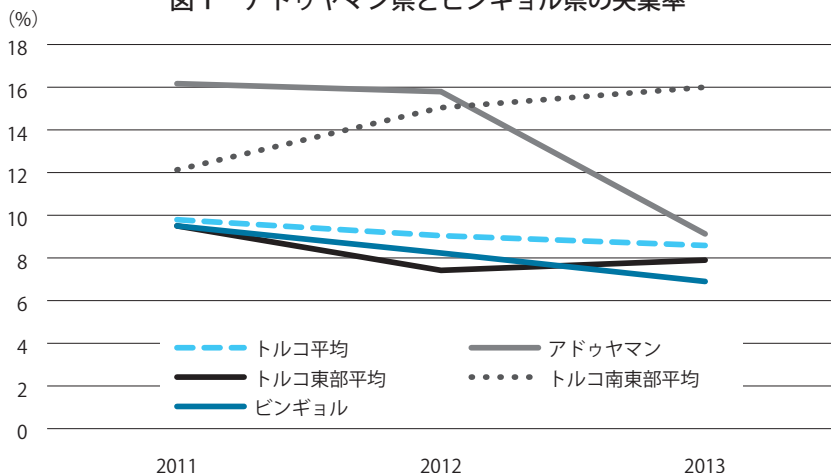
る若者たちが欲するような活動は行われていない。また、クルド人が多いトルコ南東部は、失業率がトルコの平均よりもかなり高い(図1参照)。トルコ統計協会の数値を参考にすると、アドウヤマン県の失業率は、二〇一一年が二六・一%、二〇一二年が一五・八%、二〇一三年が

表3 2015年におけるトルコ総選挙の結果(550議席)

政党/投票日	6月7日総選挙 (投票率: 83.9%)	6月7日総選挙 (アドウヤマン県)	11月1日総選挙 (投票率: 85.2%)	11月1日総選挙 (アドウヤマン県)
公正発展党	40.9% (258)	59%	49.5% (317)	69%
共和人民党	25.0% (132)	11%	25.3% (134)	11%
民族主義行動党	16.3% (80)	4.5%	11.9% (40)	3%
人民民主主義党	13.1% (80)	11%	10.8% (59)	14%

(出所) 高等選挙委員会ウェブサイトを参照し、筆者作成。

図1 アドウヤマン県とビンギョル県の失業率



(出所) トルコ統計局、世界銀行。

九・一%となっている(トルコ統計協会ウェブサイト、<http://www.tuik.gov.tr/UstMenu.do?method=temelist>)。トルコ全体の失業率の平均は、二〇一一年が九・八%、二〇一二年が九・二%、二〇一三年が八・七%となっており、二〇一一年と二二年のアドゥヤマン県の失業率はトルコの平均よりも約六%高い(二〇一三年に極端に失業率が下がっている理由は定かではない)。職に就けない若者がチャイハネなどに集まり、そこでISのリクルーターと出会い、ISに戦闘員として参加するという負の連鎖が生じている。

●クルド対クルド

(1)ビンギョル県のIS分子

アドゥヤマン県以外では、ビンギョル県からもISに渡る若者が多く、ISやヌスラ戦線などの過激派に六〇〇人以上が参加しているとみられている(アル・ジャジーラ・トルコ、http://appsaljazeera.com/interactive/isid_dosya_bingol.html)。ビンギョルには、クルド語の方言のひとつとみなされているザザ語を話すザザの人々が住んでいる。ザザなどのクルド人のなかのさらにマイノリティの

人々は、自身の民族的なアイデンティティーが不安定である。そのため、クルドという民族よりもイスラームという宗教をアイデンティティーの上位に据えているともいわれている。また、自己のアイデンティティーを不安定化させているクルドという民族性に敵意を抱く者もいる。そうしたイスラームへの傾倒とクルドというアイデンティティーへの敵意が、一部のザザの人々をシリアへと赴かせている。クルド人のイスラーム急進主義に詳しいビンギョル大学のメフメット・クルトは、「サラフィー主義に傾倒するクルド人はトルコ共和国が好きではない。しかし、同時に(PKKのようなクルド人アイデンティティーを強調する)クルド人も好きではない」という見解を述べている(アル・モニター、二〇一五年七月二三日付、<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2015/07/turkey-adiyaman-isis-connection-surre-bombing.html#>)。

トルコ統計協会の二〇一四年のデータによると、ビンギョル県はトルコ国内で二番目に自殺率が高く⁽⁵⁾、近年特にその数が増えている。自殺の理由は、将来への希望

が薄いことと薬物依存とされる。これらの若者にとっては、単なる自殺よりも天国への扉が開かれる(と彼らが信じる)ISへの参加と自爆テロの方が魅力的に映る。

ビンギョル県でも、ISのリクルート活動の中心となったのは、アドゥヤマンの場合と同様にチャイハネであり、そのリクルート方法は、①ISに加わりそうな若者と宗教に関して議論を行う、②イスタンブルやブルサに小旅行に出かける(トルコ人のムスリムとして「墮落した」生活態度をみせる)、③月に三〇〇ドルの報酬を手渡す、という三段階であった(ミドル・イースト・アイ、二〇一五年二月一日付、<http://www.middleeasteye.net/in-depth/features/rival-brothers-kurds-snatched-islamic-state-1491602783>)。その後、ISに感化された若者は、シリアもしくはイラクに向かい、戦闘に従事するようになる。ビンギョル県の住民の証言では、ISに感化された若者は、彼等が墮落したムスリムとみなしている一般の人々とモスクと一緒に礼拝せず、地下にある礼拝室で礼拝していた。ビンギョル出身の有力なISグループのひとつであった通称「髭を

生やした人々」(Sakallilar)は二〇一五年一月二二日にディヤルバクル県に潜伏中、警察と銃撃戦になり、テロリスト五名、警察官二名が死亡した。

(2)トルコ・ヒズブツラーからISへと代わる受け皿

ビンギョル県は一九八〇年代に立ち上げられた過激派イスラーム組織、トルコ・ヒズブツラーの温床であった(参考文献②)。トルコ・ヒズブツラーは、レバノンのヒズブツラーとは関係がない、スンナ派クルド人の組織である。ただし、宗派は異なるものの、PKKに対する利害が一致していたため、イランがトルコ・ヒズブツラーを支援していたとみられている。また、トルコ政府も同様の理由で、九〇年代後半にトルコ・ヒズブツラーとの関係を深めた。トルコ・ヒズブツラーはISやPKKが当初採ったのと同じ戦略を展開した。それは、「近い敵」、すなわちPKKなど同じクルド系の過激派組織への攻撃である。トルコ・ヒズブツラーは、発足当初、ライバル関係にあるクルド系イスラーム組織のメンバー一〇〇名を拉致し、拷問を加えるなど、残忍な手口を使ってその殲滅を目指した(アル・モ

ニター、二〇一二年一月二三日付、<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2012/al-monitor/hizbullah-turkey-islamist.html>。トルコ・ヒズブッラーに「近い敵」であるだけでなく、イデオロギー上のライバルでもあり、両者の抗争は激化し、約七〇〇人が死亡したとされる。その一方でトルコ・ヒズブッラーの会合には少なくとも五万人の参加者が集まるなど、ビンギョル県、バトマン県、ビトリス県、ディヤルバクル県など限られた一部の地域で民衆からの支持が厚かった。

トルコ・ヒズブッラーは一連の幹部が逮捕されたことにより、二〇〇〇年代にその影響力が低下し、現在の活動の中心は二〇一二年に発足したスナナ派クルド人の政党である「神の党」(Huda Part)となっている。政治活動に特化した「神の党」は、トルコ・ヒズブッラーの最終的なあるべき形ともいわれているが、武装闘争を展開していた戦闘員たちはいまだに地下に潜伏しているか、ISへ加わっているとする見方が強い。また、「神の党」とHDPとの衝突も二〇一四年一〇月のコバニでのISとクルド勢力の戦闘に端を

発するHDPの抗議活動以降、頻繁に起っている(『フォーリン・アフェアーズ』誌(ウェブ版)、二〇一五年五月四日付、<https://www.foreignaffairs.com/articles/turkey/2015-05-04/turkeys-other-kurds>)。HDP共同党首のデミルタシユは六月五日の爆破事件後、トルコ・ヒズブッラーの仕業であるとトルコ・ヒズブッラーを名指しで批判している。

●トルコ・ISの幹部ユースの活動地域

(1) イルハミ・バルとユヌス・ドウルマズ

トルコのISにおいて、「ドクマジユラル・グループ」の中心はリクルーターであるドクマジユである。しかし、彼はあくまでリクルーターであって実行犯に指示を出す存在ではない。それでは、「ドクマジユラル・グループ」やクルド系ISを操るのは誰なのか。その人物は、「エブーベキル」というコードネームを持つバルである。バルは、ISがトルコを攻撃したほとんどの作戦を指示した人物とされる。「ドクマジユラル・グループ」による一連の自爆テロ、警察と国家情報局(Milli Istihbarat

Teskilat: MIT) が未然に防いだといわれる三三の自爆テロ、二〇一五年三月に三人のイギリス人女子がトルコを経由し、ISへと渡った事件など、すべての背後にバルがいると報じられている(『ハベルテュルク』紙、二〇一五年一月二八日付、<http://www.haberturk.com/gundem/haber/1145707-beni-bulmak-isteyen-buraya-gelir-adresim-beli>)。ハタイ県出身で一九八二年生まれのバルは「ドクマジユラル・グループ」の若者たちと異なり、過激派としての経験が長い。二〇〇二年にアルカイダの一員として逮捕され、その後、三年間の獄中生活を経験するとともに、MITの監視対象になった。二〇一二年にシリアに渡り、まず、ヌスラ戦線に入った後、ISに渡った(『ヒュリエット・デイリー・ニュース』紙、二〇一五年二月一日付、<http://www.hurriyetdailynews.com/turkish-islil-leader-gave-orders-for-major-blasts-intelligence-reveals.aspx?pageID=238&NID=92380&NewsCatID=341>)。内務省の危険人物リストにおいては、IS関係者ではドクマジユと並び、バルは最も危

険な赤色リストのなかに名を連ねた。二〇一五年一月までガズイアンテプ県付近で活動していたが、その後、ISの拠点であるラッカに呼び戻されたとみられている。もう一人、二〇一六年三月一八日にイスタンブールの目抜き通りであるイステイックラル通りで起きたテロの首謀者とされ、アップデートされた危険人物リストで赤色リストに加わったのがガズイアンテプ県出身のユヌス・ドウルマズ(Yunus Durmaz)である。ドウルマズは三月のテロだけではなく、一〇月のアンカラでのテロ、そして二〇一六年一月二日にイスタンブールの観光名所のブルーモスクの近くで発生し、ドイツ人を中心の一〇名の外国人観光客が死亡した爆破テロの計画を練った人物とみられている。トルコ政府は二〇一五年一月にガズイアンテプでIS掃討作戦を実施し、ドウルマズは取り逃がしたものの、彼の所有していたパソコンを押収した。そのパソコンからは、二〇一五年一月にアンタルヤで開催されたG20を狙ったテロ計画さらにはトルコ人、クルド人、トルコマン人、アレヴィー教徒の対立を煽り、内戦を起こさせる計画に

関する文書が発見された。

このように、赤色リストに名を連ねる幹部は、リーダーで組織の活動を統括するバル、リクルーターであるドクマジユ、そしてテロ攻撃のプランナーであるドウルマズ、というようにその役割分担が明確である。

(2) ISの兵站線としてのキリス県とガズイアンテプ県

ISが主にトルコへの出入国で使用していると考えられているのが、ジャラーブルスとガズイアンテプ県との国境と、アル・ライとキリス県との国境の二カ所である。トルコ政府が二〇一五年に拘束したISに関連する外国人戦闘員は九一三人で、最も多かったのは中国人の三二四人、次いでロシア人の九九人、三番目はパレスチナ人の八三人となっている(『ヒュリエット・デイリー・ニュース』紙、二〇一五年一月五日付、<http://www.hurriyetdailynews.com/most-tisli-members-detained-on-turkish-border-come-from-china.aspx?pageID=238&nID=92386&NewsCatID=352>)。拘束した戦闘員の出身国は五七カ国にもおぼろげとみられている。四七八人はシリアからトルコへ入る際に、

四三五人はトルコからシリアへ入る際に拘束された。ほとんどがキリス県のエルベイリ地区で拘束されている。二〇一五年夏にトルコとシリアの国境間に壁が建設され始めるまでは、多くの人々が国境を往来していた。

キリス県とともにISが通路とし、トルコでの作戦の拠点を構えていると考えられているのがガズイアンテプ県である。アンカラのテロの際に運転手を務めたハリル・イブラヒム・ドウルガン等もガズイアンテプに潜伏しており、一月一四日に警察との銃撃戦の末、ドウルガンは自爆して死亡した。また、トルコのテロ活動センターの調査によると⁶⁾、自爆テロに使われるベストはガズイアンテプ県で製造されている。二〇一四年にトルコ警察が三三枚の自爆用のベストをキリス県とガズイアンテプ県で押収するまで、自爆用ベストはシリアで製造されていた。しかし、押収された後はトルコ国内での製造に切り替えたとみられている。ISは実行したテロ以外に、製造したベストを、イスタンブールのHDPの事務所へのテロ、G20の襲撃といった未遂に終わった計画にも使用を検討していた。

●おわりに

本稿では、アドウヤマン県出身者を中心に結成された「ドクマジユラル・グループ」の活動、ビンギョル県における過激派のルート、トルコISの幹部とその活動地域を概観し、トルコにおけるISの

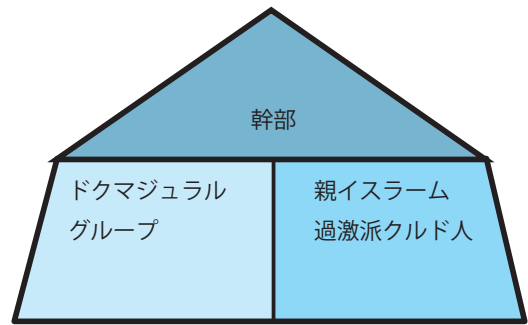
起源と構成について検討してきた。本稿で明らかになったのは以下の諸点である。第一に、アドウヤマン県とビンギョル県の若者がISに引きつけられるのは、失業率、現状への不満といった構造的な問題が背景にある点である。これは、フランスをはじめとしたヨーロッパのムスリムが外国人戦闘員としてISへ渡る動機と共通する。第二に、アドウヤマン県とビンギョル県におけるISの若者への巧みな勧誘方法である。第三に、ビンギョル県にはトルコ・ヒズブツラールの影響がいまだに残っており、関連する人物がISに渡っている点である。第四に、アドウヤマン県とビンギョル県からISへ向かう若者たちは確かに実行犯であるが、その背後に居るのはイルハミ・バル、ムスタファ・ドクマジユ、ユヌス・ドウルマズといった「真のテロリスト」たちである。彼らの主な敵はこれまでたびたび逮捕

されてきたトルコ政府であり、彼らにとってはトルコ政府を脅威に陥れることができれば、その大義名分はトルコ・ヒズブツラーでもアル・カーイダでもISでも構わないのである。

本稿で論じてきたように、トルコISは①アドウヤマン出身の若者から成る「ドクマジユラル・グループ」、②ビンギョル県出身でイスラームに傾倒するクルド人、③組織を統括する幹部たち、という三つのカテゴリーに区分できる(図2参照)。

二〇一五年一月一三日のパリ同時多発テロ、二〇一六年三月二二日のブリュッセル連続テロ事件にみられるように、ISはこれまでの「近い敵」、すなわち中東地域の政府や非政府組織を狙う戦術から「遠い敵」である欧米諸国を狙う戦術に軸足を移しつつある。この傾向はトルコISが二〇一六年にイスタンブールで起こした二つのテロにも当てはまる。これらのテロは明確に観光客を狙ったものであった。また、トルコ軍とIS本隊との衝突もキリス県の国境付近で二〇一六年四月以降、激化している。これはトルコ南東部の「シリア化」、もしくは戦場がトルコ

図2 トルコ・ISの構成



(出所) 筆者作成。

南部にまで拡大したことを意味する。パリ同時多発テロの犯人たちもガズイアンテプ経由でトルコに入ったとみられており、トルコISが彼らをギリシャ国境付近までエスコートした可能性もある。公開資料が限られているため容易ではないが、さらにトルコISがラッカのIS本隊、そしてヨーロッパで活動するテロリストたちとどのような接触があったのかを考察することでISの世界戦略においてトルコIS、そしてトルコという場所を持つ役割がより明確になるだろう。

※二〇一六年五月一八日にガズイアンテプ県でユマス・ドウルマズの潜伏先に警察の自宅捜査が入り、ドウルマズは自爆して死亡した。

(いまい) こうへい/アジア経済研究所 中東研究グループ)

《注》

(1) TAKは都市部でのテロ活動の特徴とし、二〇〇五年に観光地であるクシヤダシユ、二〇〇六年にマラトウヤ、二〇一〇年にイスタンブル、そして二〇一五年一月にイスタンブルのサビハギョクチェン空港でテロを実行している。TAKに関しては、たとえば、Mahmut Bozarslan, "Who Is TAK and Why Did It Attack Ankara?" *Al-Monitor*, 29 February, 2016.

(2) 「イスラーム国」にはダーイシユ、ISIL (Islamic State in Iraq and the Levant) などさまざまな呼称がある。本稿ではひとまず「イスラーム国」という呼称に統一する。「イスラーム国」の呼称に関しては、中東調査会イスラーム過激派モニター班『イスラーム国』の生態がわかる45のキーワード』明石書

店、二〇一五年、五〇〜五二ページ。トルコ語ではISILのトルコ語訳である *Irak ve Samiyan Devleti* を簡略化した ISID (ウシッド)、もしくはダーイシユが使われている。

(3) ただし、アドウヤマンからISに渡った若者の人数に関しては、一〇数名というものから五〇〇名に至るまで証言があり、正確な数字はわかっていない。

(4) 議員団は、CHP副党首のヴェリ・アーババ、アンカラ選出のネジャヤティ・ユルマズとシェナル・サルハン、イスタンブル選出のアリ・シェケルとエレン・エルデム、ガズイアンテプ県選出のメフメット・ギョクダーから構成された。

(5) トルコ統計局の最も新しい二〇一四年のデータによると、自殺率が最も高いのはトゥンジエリ県、次いでビンギョル県、エディルネ県、シノプ県、クルシェヒル県となっている。

「*Intihar İstatistikleri, 2014*」
<http://www.tuik.gov.tr/PreHaberBultenleri.do?id=18626>。また、二〇一三年のデータでもビンギョル県は三番目となっている。「*Intihar İstatistikleri, 2013*」
<http://www.tuik.gov.tr/PreHaberBultenleri.do?id=16049>。

(6) テロ活動センターは、二〇一五年七月二十四日トルコ首相府の傘下に設置された組織で、アフメット・ダーヴトオール首相(当時)は「トルコ国内のすべてのテロを根絶やしに」することを設置の目的として掲げた。IS、PKKだけでなく、革命主義者人民解放党 (Devrimci Halk Kurtuluş Partisi-Cephesi: DHKPC) に代表される極右組織も取り締まりの対象としている。

《参考文献》

① 今井宏平「イスラーム国」に翻弄されるトルコ『ダーヴトオール・ドクトリン』の誤算と国際社会との認識ギャップ」(『中東研究』第五二二号、二〇一五年)三二—四三ページ。
 ② Mehmet Kurt, *Türkiye'de Hizbullah*, İstanbul: İletişim, 2015.